

第5章 おはなしむろらん

「おはなしむろらん」は、昭和50年(1975)から同60年にかけて、子どもたちに郷土の歴史や伝説を知ってもらうために、図書館が市内に伝わるアイヌ伝説をもとに童話風にまとめたもので8編あります。ここでは当時図書館職員だった前田亨之さんがまとめた「室蘭屯田兵ものがたり」「春を告げる室蘭岳のニシンの雪形」の2編を紹介し、作成当時のままの内容を掲載しています。

ほか6編の問い合わせは、図書館(電話22 - 1658)まで。また、これらのお話は、昭和62年(1987)に袖珍書林から『室蘭むかしむかし チケウの海の親子星』として、出版されています。

- | | | |
|-----------------------|-------|---|
| ・母恋と地球岬の金屏風 | 前田亨之 | 作 |
| ・アフルパロものがたり | 前田亨之 | 作 |
| ・室蘭屯田兵ものがたり | 前田亨之 | 作 |
| ・たこ沼のはなし | 前田亨之 | 作 |
| ・春を告げる室蘭岳のニシンの雪形 | 前田亨之 | 作 |
| ・大蛇になった二十日ねずみ | 前田亨之 | 作 |
| ・アトカニ岩とタコ八 | 深海秀俊 | 作 |
| ・銀びょうぶの話 - ムイとアワビの話 - | 図書館編集 | |

『おはなしむろらん』をまとめた
前田亨之さん(1939-1977)

母恋南町に生まれ育つ。室蘭の高校から千葉大学に進み、教師を志すが心臓を病み断念。市立室蘭図書館に勤務。

郷土資料室の担当になり、郷土資料の掘り起こし、収集・整理に努めた。屯田兵として入植した人の話を聞き次の世代に残すため『室蘭屯田兵』をまとめ、昭和20年の空襲・艦砲射撃の被災記録を作成。

児童室に来る子どもたちに向けて「おはなし」の時間をもち、生まれ育つ土地の昔話を聞かせたいと思い、自ら筆を執り、6篇のお話を創作した。

1. 室蘭屯田兵ものがたり

そうさの一、わしが親父とお袋につれられて、暖かい四国からこの寒い北海道の室蘭にやってきたのは、明治二十年五月のことじゃった。

親父が「屯田兵の募集で北海道に行く」と言い出した時にゃ、祖父様や親類全部が反対しての一。今と違って、簡単に北海道に来れる時代じゃなかったから、そりゃー大ごとじゃった。

「北海道は、一年の半分以上が雪で一面、山と森林だけの国じゃ。そんなところで、田んぼや畑など作れっこね。おまけに住んでいるのはアイヌとかいう得体の知れぬ人間と囚人だけじゃ。熊に喰われるか、凍えて死んでしまうか、ふたつにひとつじゃ。

悪いことはいわねえから、よした方が無事じゃ」と行くのを止めるよう忠告されたんじゃが...

じゃがの一。親父は三男坊で、田舎に住んでは、田んぼは分けてはもらえん。一生小作人じゃ。わしら子供も四人もおって、生活は楽じゃなかったしの一。

屯田兵で北海道に行くなら、三年間お国がわしらの生活の面倒を見てくれる。また、その間に作った畑や田んぼは、全部タダでくれるというし、取れた作物は売っても、食べても自由にしてええ。おまけに子供達は学校に通わせるし、病人には医者もいる。死んだ時にゃ、お金もくれるという、いいことづくめの募集じゃった。

.....

なんという船じゃったか、名前は忘れてしもうたが、大きな船での一。千人以上の人に乗っているの一。わしらは室蘭の輪西村という所に入植したのじゃが、残り半分位は、札幌の新琴似という所に入植するといってたの一。

船中じゃ、皆んな仲良うしてな。子供たちは「わしらは屯田兵じゃ。開拓屯田兵じゃ！」ちゅうて、一日中遊び回ってな。ほんに楽しい船旅じゃった...

じゃがの一、入植した輪西村は、それはそれは大変ひどい所じゃった。

ヤチダモの木や葎が生えている湿地帯での一、狐などがよう出よる春には、やっと耕した畑も雪融水でぐちゃぐちゃになったり、夏は日照りの日が少なく、ガスがかかったりして、作物の育ちも悪く、秋の取り入れの頃には大風や大雨が吹いたり、降ったりで、ロクな物も取れなかった。でも、大豆やジャガイモは割りとうよう取れたの一。それで、ご飯にはよくジャガイモなどを混ぜて食べさせられよった。

親父は屯田兵じゃから、訓練があつてな、朝早くに「トテ、トテ、トテチー、トテ、トテ、トテチー」、「兵隊さんよ、早よコー」って、ラッパが鳴ると、皆んな起き出すんじゃ。

それから、ママを食って、親父は屯田兵の中隊本部に、かけ足で集まるんじゃ。

本部は、今の中島神社のある森ん中の一。そこには、中隊長や軍曹などの偉い人が詰めていたし、近くには、馬や豚などを飼ってる牧場や共同作業場とって、カイコのまゆを糸につむぐ工場もあつた所じゃ。

親父たちが訓練に出かけると、あとは家中の者が、割り当てられた土地を耕しに出かけ、子供らは学校に行くんじゃ。学校の名前は私立塵別小学とゆうたが、街の者は屯田学校ともいってたの一。

学校では、ソロバンや書き方、読み方なんぞを教わつたが、試験もあつたんじゃぞ。先生は髭なぞをつけた、ちょっと恐い人じゃつた。

学校で一番楽しかったのは、学校の田んぼや畑で、稲やジャガイモ、野菜などを作って、街に売りに行ったりしたことじゃ。“汗を流して作ったもんが銭になる。一生懸命働けば、いつか必ず立派な作物になって、お国のために役に立つ”と、よう先生がいってつたなあ一。

.....

そうじゃ、子供たちで室蘭の街に行ったとき、こんなことがあつたの一。

今の室蘭駅のあたりから、丸井デパートの前の道は、札幌通りとってな。そりゃー、賑やかな所じゃつた。宿屋やお店が沢山あつて、デッチさんが着物の前に前垂をつけてくるくると忙しく働いておつたり、日傘をさして、きれいなベベを着た娘さんが歩いていたり。乗合馬車がガラガラ音を立てて走っていたり、銭がのうても、人間を見てるだけで胸がワクワクしたものじゃ。

じゃがのう、街の腕白どもは、わしらの姿を見つけると、

「屯田兵の子じゃ、ポロ屯田兵じゃ！」ちゅうて、わいわい集まってきて馬鹿にするんじゃ。

「ヤーイ、ヤーイ、屯田 屯田 イモ屯田 イモ屯田のクソツタレー！」

わしらも負けずにこういってやるんじゃ。

「何を！わしらはクソツタレなんかじゃないわい。わしらは屯田兵の子じゃ。お国を守る屯田兵じゃ。今度そんなことをヌカスとぶんなぐるぞ！！」ってな。

そういうと、街の子はあわてて逃げたり、かくれたりしよるのじゃが、遠くから

「イモメシ、ムギメシ、アワメシ、何んでも食べる。トットツ屯田兵 ワーイ！」とはやしただてるんじゃ。

こんな歌をうたわれると、わしらはシュンとなつてしまふんじゃ。

それというのな、この歌のとおり、わしらのご飯にはイモやムギやアワやヒエなどが混じつてのう、大変貧乏していたんじゃ。

今、わしらが住んでいた屯田兵の土地には、鉄道が走り、新日鉄の工場や社宅などが建つてしまつたんじゃが、あそこは、わしらの親父たちが、屯田兵として一番最初に開拓した土地なんじゃ。

いつか中島神社に行ったら見てらっしゃれ。そこには、屯田兵の記念碑や服や帽子や書類などが大切に残されておるんじゃ。

おわり

2. 春を告げる室蘭岳のニシンの雪形

むかしむかし、ずっと昔のことでした。

にぶく輝く太陽が、冬の厚い雲にすっぽりと包みこまれた暗い空の下に、長くうねうねと続く白い山脈がありました。この山脈の終わりの処に、室蘭地方をひと目で見渡せる高いひとつの山。

その山の麓の近く、エゾ松やトド松、ヤチダモやオヒヨウの木に囲まれて、雪の埋まった小さな冬小屋が一軒、ポツンとたっていました。

冬小屋には、十歳くらいの少年とお母さんが住んでいて、寒い冬が通り過ぎていくのをじっと待って暮らしていました。

木枯らしがピュー！ピュー！と木々の梢を鳴らし、熊笹が茂るチマイベツ川の崖の下から、もうもうと渦を巻いて吹き上げる地吹雪もようやくおさまったある晩のこと、冬小屋の戸を「トントン、トントン」と弱々しく叩く者がいました。

「おや！？こんな時分、いったい誰でしょうねえ？」

赤々と燃えるいろりの側で編物をしていたお母さんが、少年を見ていいました。

「ビョーン、ビョーン」とムックリの練習をしていた少年は、「誰か来たの？... ぼく、何も聞こえなかったけれど...。じゃ、ちょっと見てくるよ！」

そういつて、土間におりると、草ぶきの重い戸をギギ...と開けて、外を覗いてみました。

雪明りの小屋の外には、いまにも倒れそうによるよると杖にすがって立っているひとりの老人がいました。

「ま...まことにすまんが、と、とめては下さらんか」とふらふらと片方の手を泳がしてこういふと、その老人は、ずるずると足もとの雪の上に座り込んでしまいました。

「お母さーん！！知らないお爺ちゃんが大変だヨー！！」

少年とお母さんは、急いで老人を抱きかかえて、小屋の中に入れました。

暖かいいろりの側に座った老人は、髪もひげもまっ白でのびほうだい、冬だというのにボロボロの布を二、三枚重ねて着ているだけのひどい身なりです。骨と皮のしわだらけの手をぶるぶると振わせ目を閉じて火にじいっと当てていました。

やがて、そうっと目をあけた老人は、ひと息、大きく深呼吸をすると、「あーあ、やっと人心地がついた。暖かく燃える火は、年寄りにとっては何よりの御馳走じゃ。ご迷惑じゃろうが、今晚ひと晩、泊めては下さらんか」

そういつて、老人はお母さんと少年に頼みました。

「ええ、よろしいですとも。ご覧のとおり貧乏で、特別なご馳走を差し上げることもできませんが、ひと晩といわず、二日でも三日でも元気になるまでいて下さいな。」とお母さんがいいますと、少年も「そうだよ、お爺ちゃん。ゆっくりしていくといいよ。今夜はぼくと一緒に寝ようね。」

「おお、ほんにありがたいことじゃ。それじゃ、遠慮なくごやっかいになりますぞ」

お母さんが作った、あったかーい雑炊を美味そうに食べ終わった後、老人と少年はひとつ蒲団にくるまってやすみました。いろりの側では、お母さんが老人の着ていた着物を熱心につくろっていました。

蒲団に入った少年は、なかなか寝つかれず、老人の顔をキョロキョロ見えています。

「どうしたんじゃね、わしの顔に何かついてるかね？」

すると少年は、頭を振って、「ううん、おひげを見ていたの。ぼくのお父さんもおひげを生やしているんだよ。でも、お爺さんと違って黒いんだ。黒くでごわごわして、さわると痛いんだよ」と言いました。

「ふーん、お父さんがいたのかね。じゃが、ここには居なさらんようじゃが、どこかへ行ったのかな？...」

「うん、お父さんはコタンの人たちと一緒にユーラップの山の方に稼ぎに行ってるよ。木を切り出して、春には帰ってくるんだ」

「ほー。この近くの海には、ニシンやカレイや秋味が沢山とれると聞いたが、どうした訳じゃな？」

「あのね、今年は魚が全然とれなかったの。春のニシンなんか今年も去年もその前もほんの少ししかとれなかったんだって。ニシンを見つける時が遅かったって、お母さんがいったよ。だからぼく、今度の春は雪が融ける前から海に行って、きっとニシンを見つけるんだ。そしたらお父さんも、もうどこにも行かなくてすむんだもの。ね、お爺ちゃん、そうでしょう」

「うん、お前は感心な子だね。...そうか、ニシンを見つける時が判からなかったのか...うーん、そうか、そうだったのか...」

老人は、少年の話を聞いて、何かひとりうなずいていました。いつの間にか、少年はすうすう寝息をたてて、ぐっすり寝てしまいました。

外は寒い冬の夜。でもこの小屋の中は薪が時々、パチパチと音をたてて弾け、ほのぼのと暖かい炎の色がゆらゆらとゆれて動いていました。

あくる朝、食事が終わると老人がいました。

「大変、お世話になったが、わしゃ先を急ぐ旅でな。もう出発せねばならんのじゃ。何かおかえしを上げたいんじゃが、見る通りの手ぶらでな。そこで、お前さんたちに『春』を上げたいんじゃが、もらってくれるかね？」

「春、ですか!？」

お母さんは目をまるくしてきき返しました。

「うん、そうじゃ。春じゃ。いいかな。この冬小屋のうしろに高い山があるじゃろう。あの山を注意して見ていなされ。これからは冬が通り過ぎて、この辺りの雪がみんな消えてしまう頃、あの山にニシンの形の雪が残って見られるようになるじゃろう。そのニシンの雪形が見えるようになったら、それが春じゃ。そうしたら、沖にでてニシンの漁にかかるがよい。また、畑をおこして種まきの用意をするがよい。山に雪のニシンが見えているあいだ、この沖ではニシンを沢山釣ることができるようになるじゃろう。そうなればもうお父さんとはなれずに一緒に暮らすことができるじゃろうて。よいかな、山をようく見てるのじゃぞ」

そうって老人は少年の頭を軽くなせて、キラキラ光る雪の中を杖をつきながら、林の中に消えていきました。

冬が去り、お母さんと少年は冬小屋から海辺の夏小屋に移り住み、まだ冷たい海の中に入って、マツボヤノリや、エビ、カニなどを取って暮らしていました。

少年は時々山を眺めて老人が言ったニシンの雪形を見つけようとしたが、山にはまだ雪が沢山残っていました。

二週間ほど過ぎたある朝早く、少年が山を見ますと、山の雪はほとんど消えて、中ほどの処に何か細い雪の線が見えます。よく目をこらして、じいっと見ていると、魚の形に見えてきました。

「ワーイ、雪形だ!お爺ちゃんのいったニシンの雪形が見えるよ!!ニシンがやって来るよ!!」

そうって、少年はコタンにいる人たちに知らせました。

初めは信用しなかったコタンの人たちも、少年が余りに熱心に老人のいったことを話すので、沖に舟を出してみました。

すると、どうでしょう。黒く海が盛り上がるように、ニシンの大群が来ていました。

それから後、室蘭地方のアイヌの人たちは、この山をヘロキウパシ、ニシンの雪の山と呼んで、山を見て春の知らせを待つようになりました。また秋に三度、この山に雪が降って消えると、コタンの里は根雪になるとも伝えられています。

